

2007 10.27
vol.96

WEEKLY OSAKA NICHINICHI

週刊 大阪日日新聞

週刊大阪日日新聞社 / 〒541-0059 大阪市中央区博労町2-6-8 大阪日日新聞内 TEL.06 (6120) 1970 FAX.06 (6120) 1

大阪市内の住宅に洞くつ!?

大阪経済法科大・沢教授が自宅に再現

世界の約300カ所の洞窟を訪ね、研究を続けている大阪経済法科大学の沢敷教授(69)が大阪市西淀川区野里の自宅向かいにある別宅を2年かけて改造し、洞窟(どくつ)の成り立ちや内部の「二次生成物」などが一目でわかる「洞窟八学。だが小学一年生の時

初となる「洞窟科学」も教養科目として教えており、教科書は2人の同僚教授と共同執筆した「洞窟科学入門」と「DVD-ROMの洞窟写真集(いずれも同大出版部)。調査で撮影した写真は約5000点にも上る。このうち一般の人にも興味を持ってもらえそうなもの約380点を厳選し、収録した。

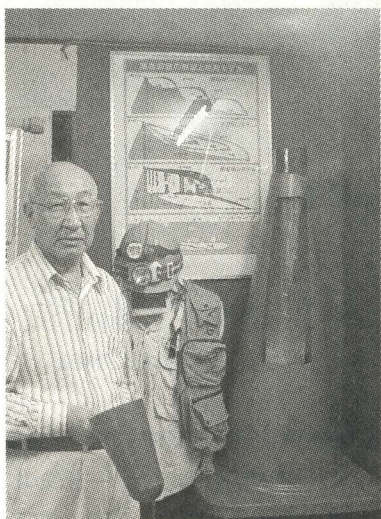
「おもしろく、分かりやすく、暮らしたのかわりが見えてくるような本にするのに腐心した」という労作で、沢教授が「洞窟科学のバイブル」と力を入れる自信作だ。

「洞窟ハウス」はそんな洞窟の魅力を「もっと知ってほしい」との願いから「洞窟学入門」の内容を具体的に別宅に再現したもので、すべて手作



沢教授手作りの「洞窟ハウス」は青色の照明で地底の雰囲気を出している

たいまつ片手に踏み込んだ洞窟の魅力が忘れられず、40年ほど前から洞窟調査にのめり込んだ。これまでに国内はもとより韓国、中国、米国など7カ国、約3000カ所を訪れている。また大経法大ではアジア



「火山噴火口はカライーンで表現している

りした。沢教授はすでに2004年、自宅の床下に幅約1・3メートル、奥行き約1・5メートル、高さ約1メートルの一見すると収納庫風の「ミニ洞窟」を掘り、調査時に世界中から集めてきた岩石などを展示するとともに、希望者には公開もしていた。しかし「ミニ洞窟」だけでは飽き足らず、さらにグレイドアップした施設をついに手作りしてしまった。

同ハウスには溶岩などの鉱物資料や写真も多数展示されているが、目玉は100円ショップで買ったペットボトルやかき、花瓶などを使った模型の数々。プラスチックの成型品による鍾乳石や石筍(せきじゅん)、カラコーンで表現した噴火口、浴槽は溶存プールで、滝には音も流されている。洞窟の成り立ちなどを、子どもたちにも簡単に理解できるようにするためのアイデアと努力のたまものだ。

「洞窟はわたしがそうであったように、子どもたちの無限の夢と知的好奇心をかきたてる」と、沢教授は期待する。洞窟調査には体力が必要と、今も空手(糸東流8段)などでのトレーニングを欠かさない沢教授は今後も世界各地の洞窟を訪れる続けることだろう。